お話の問題

長尾豐

一

手技や觀察と並べられる幼稚園の談話も、普通一般にはたゞお話とだけ呼ばれてゐる。おはなしなんといふ分りの好い、優しい言葉であらう。語原の調べてある辭書を引くと、ハナすは放すで、中にあるものを解放・發表する意味ださうである。かた〳〵面白い言葉だと思はれるが、一方から考へると談話もお話も普通一般に考へられてゐるところでは、餘りにその意味が廣過ぎて、幼稚園の談話とかお話とかいふものを考へる時には少し困るくらゐでさへある。

談話は辭書に「はなし、ものがたり」などとあるからそれで好いとしても、たゞお話と言ふと談話・會話・訓話・講話をはじめ、童話も寓話も、史談逸話も、民話笑話も、みなその中に含められる。會話は向ひ合つて話すこと、外國語で話すことであり、訓話は戒めのはなし、講話は學術上のはなしといふ風に、辭書を繰つて見ればその相違が分るとしても、戒めのはなしといふ中には、動植物の假面の下に人生の眞理を藏した寓意談もあれば興味ある物語の中に見易い意味を包んだ敎訓談といふものも入るわけになる。ところで訓話の名稱は、早くから「朝の訓話」などと譯されてゐるモ

オニング・トオクスのトオクスに當るもので、テエルスやストオリイスの說話物語とは別なやうに考へられる。

西洋にはこの種のものが多いと見えて、子供のための演說、說敎、小說敎などいふものを集めた書籍も、カナリにある。かういふお話は物語ではない。又同じくフレエベルのお話をするにしても、「幼稚園の創始者フレエベルは、ドイツのチユウリンゲン森林地方の一村に生まれました。」と話出すのと、「今から百年許り前に、ドイツの森林地方の或村に、ひとりの子供が生まれました。」と話始めるので、つまる所は同じことを言ふのであらうが、お話としては大分の相違が生じて來る。

二

物語としてのお話がほんたうにお話であるためには、どのやうな形態を具へてゐなければならないか、よいお話、面白いお話としてはどんな構造をもたなければならないか、といふことは、お話選擇のどの條件よりも先に來るものであり、お話改刪のいかなる方法よりも先に考へられなければならぬ問題である。これを飛越して、もしくは後廻しにして、お話の選擇やその改刪を言ふ人があれば、それは本顚末倒の、根幹を忘れて枝葉をたづねるものであつて、曲りなりにもしそれが出來たにして見たところで、先づ役には立ちさうもなく、多くの場合出來ないのがほんたうで、出來る方が間違つてゐるとより外思はれぬ。

ひとつのお話を詳しく調べると共に、ひろくお話といふものを見渡して考へなければ、お話の形態や構造といふものも十分に分らないから、狹く深く心をひそめて研究すると同時に、趣味をひろく、眼界をひろく、いづれかの一方へ片寄らぬやうに、絕えず廣汎な範圍に亘つて常にお話渉獵を

怠らぬといふことも大いに必要なことである。深く心をひそめて調べて見なければ、お話のもつ構造や形態が明らかに看取されないから、何がよい話で何がさうでないか選擇することも出來ず、ひろく見渡して居るのでなければ、話をもつて話を補ひ、類話にかんがみて訂正改刪することも出來ず、結局何にも出來ないことになる。

お話それ自身を調べることをせずに、强ひてそれをすれば取捨選擇に迷ひ、訂正改刪をあやまるのが先づ當前で、假に一二度のまぐれ當りで失敗を免がれたとしても、それが長く續かないのは餘りにも明白過ぎる話である。

お話に取つて大切なのは、いかにお話それ自身の生命を他に傳へるかであつて、話者自身が活動し躍動してお話を他に示すことではない。

三

話者はお話にその位置を讓つて、お話の陰にかくれ、お話を表面に現出させるものである。世の多くのあやまれる實演童話家が、お話を利用しお話を驅使し正當な取扱ひを忘れて自己陶醉や宣傳の具に用ひ、名聞利欲のためにこれを酷遇虐待至らざるところなき醜態を演じて居ようとも、心ある話者は聞手を愛するその同じ心から、話を愛し言葉を愛して、口述文學であるよきお話を幼兒に與へ、ほんたうに兒童のための藝術であるすぐれた話方を企圖すべきである。

たゞ今日お話を調べようとすれば、いくらかのお話書があるだけで研究の機關もなければ、又それをする便宜も容易に與へられないやうである。ブライアントの『お話の仕方』をはじめ、クレッヂイの『童話の研究』キャザアの『お話教育』そのほかワイチやペアッリッヂの所說もおほかたは紹介されてゐるやうであるが、どういふものか餘

り世の注意をひかぬらしく、まじめな研究よりも空疎な童心論や、片寄つた童話論や、屋上屋をかさねるやうな話方の注意などに蔽はれて表面に浮かび出ない有様でさへある。

世界の說話の紹介・研究やわが國の民間傳承の物語が蒐集され、整理されることも、日一日と進んで來てゐる。多くの特志な研究家によつて、今まで分らなかつたものが明るみに取出され、歲月の枯葉に埋もれてゐたものが新らしく拾上げられ見直され、學問の光に照らし出されたものも少なくない。

お話を研究する者、しようと思ふ者が、これらのすべてに亘つて關心をもつことは、或ひは至難な業であり、又さまでの必要もないかは知らないが、「お話」に關する諸般の問題にモウ少し心をとめ、意を用ひることを怠らなかつたら、その研究者は常に新鮮な興味と不斷の熱意を持ち續けて、眼界をひろめ、僅少の努力が直ちにむくひられ研究の道がひらけて、有用の事柄を愉快に容易にマスタアすることが出來るであらう。

夏淺き鮎のひらめく夕日かな

天涯